

松波むかし語り ここに住み続けて

その36

今回のお客様

「えりやま内科皮フ科医院」の先生

ほそかわ

ようこ

細川 洋子 さん 3丁目

“めんどろ見がよく、よく患者さんの悩みを聞いていた父のようにになりたいと思います”



この方のお話は、青森市内から始めなければなりません。えりやま医院の先代、啓吉先生が、終戦を機に樺太医専から北海道大学医学部に編入し、卒業後、札幌市内の病院を経て青森県立病院や太宰治で有名な五能線沿線の病院勤務ののち、青森市内で診療所を開設します。洋子先生はそこで生まれ、小学校の前半まで過ごしました。その頃を先生は、「両親とも夜昼なく働く働き者だった」と語ります。やがて一家は、ねぶた祭りの思い出とともに「雪のない街」を目指して松波にやってきました。啓吉先生は小児科が専門でしたが、昭和41年、赤ちゃんからお年寄りまで幅広く診てもらえる「内科胃腸科医院」として、江利山医院は松波の地に根をおろしたのでした。



平成2年9月 啓吉先生ご夫妻

ところが平成4年10月、啓吉先生が突然倒れます。先生が倒れることは、今日から診療がストップすることを意味します。そこで当時、都内の病院に勤務していた洋子先生は急きょ松波に戻り、この日から診療を開始します。「患者さんに処方箋が出せないということは、ぜったいに避けたかった」と当時の状況を語ります。「幸い、やはり勤務医であった夫が週1回通ってくれて、閉院にせず済みました」。翌5年1月にはその武典先生が内科を、洋子先生が

皮膚科を担当して「えりやま内科皮フ科医院」が再スタートしました。「父を知る患者さんが、『先生にはお世話になりました』と感謝の言葉をかけてくださるのがありがたくて…」。「患者さんに支えられて、ここまでやってこれました」という言葉には、実感がこもっているような気がしました。

「東京で空襲に遭って越して来られた方が案外多いとか、みなさん、一人ひとりドラマを秘めておられます。父もよく患者さんの悩みを聞いていましたが、話をすれば気が楽になることもあります。私もそういう医者を目指したいと思っています」。「人見知りする性格で、最初は医者に向いていないかと不安でしたが、患者さんが『話を聞いてくれて、症状の説明をしてくれるからいい』と言ってくださるとうれしい」という洋子先生、仕事以外では、俳句が趣味とうかがいました。「俳句をつくる会に参加したり、ネット句会にも投句しています。年齢も職業も関係なく、俳句を通していろいろな方と付き合うのは楽しいですよ」と語ります。医者と俳句、意外な結びつきもわかるような気がします。

着膨れて 津軽じよっぱり 通しけり

自らの句集『半球体』に登場する句ですが、「じよっぱり」は津軽弁で強情っぱりのこと、吹雪の中でも「じよっぱり」を貫き通そうとする津軽女の意地を一瞬見た思いがしました。

